JOKER

ken

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＪＯＫＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ５１６０Ｚ

【作者名】
ｋｅｎ

【あらすじ】
《魔術》が《科学》に変わって世の絶対的存在として君臨してから数十年、世界は『第三次世界大戦』、通称『魔術対戦』によってその姿を見るも無残なものに変えていた。そんな時代に、魔術によって罪を犯す者『違法魔術師』を独自に裁く者が現れた。曽根崎虚。人は彼を『道化師（ジョーカー）』と呼ぶ――――――。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１－１　＝混沌を支配する者＝（前書き）

この物語はフィクションであり、実際の団体・個人とは一切関係がありませんので、予めご了承ください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１－１　＝混沌を支配する者＝

科学が世の絶対的存在として君臨したのは、一体何百年前までの話だっただろうか。
それを思い返すのも億劫なほど、時間は過ぎ去ってしまった。
今、科学に取って代わって世を支配するのは、《魔術》と呼ばれる力だ。
何時、何処で、どうやって現れた力なのか、ハッキリとした記録は無い。
『一人の人間が世に広めたもの』と言う者もいれば、『自然が生み出した未知の力』などと言う者もいる。中には『悪魔が人類に授けた力』などとほざく者もいる。
科学に代わって人々の生活に溶け込んだその力は、まだまだ謎が多く残されている。
だが、一つだけ確実な事がある。

『魔術が必ずしも人類の味方をするとは限らない』、という事だ。

いや、魔術そのものに何らかの問題があるわけではない。
問題があるのは、その魔術を行使する側、つまりは人間だ。
人は何をするにおいても、周囲と比較したがる。競いたがる。そして――――――自分が一番だと信じて疑わない。
最初は純粋な向上心でしか無かったたそれは、時が経てば、己の権力、力を誇示するための道具として扱われる。
それにより、人類は三度目の過ち（あやま）を犯してしまった。
第三次世界大戦（だいさんじせかいたいせん）である。

無数の魔術が交錯し、家は燃え、都市は消失し、そして人は天に

帰す。
青き星に住まう命は、既に２０億人以下にまで、その数を減らしてしまった。
その２０億人の頂点に立つのは、かつてイギリスと呼ばれた島に聳える魔術の頂点『国際魔術師統率機構（IMCS）』である。
彼等の任務は、魔術による犯罪を行う者、『違法魔術師』の撲滅とされている。表向きは。
そう、それはあくまで彼等の使命の側面に過ぎない。
本来の使命は、現世界政府にとって邪魔となる存在の排除。早い話が――――――殺し屋だ。
彼等は今日も、違法魔術師から世界政府を守るべく、どこかで暗躍している。

そして、もう一人。
統率機構とは別に、違法魔術師を裁かんとする一人の青年がいた。圧倒的な力を以って、全ての魔術師から畏怖される存在。夜、違法魔術師の前に現れ、彼等を生かしたまま裁き、朝には姿を消している。
その名は――――――――――――――――――――。

■□■□

太陽が闇の彼方に沈んだ頃、彼等は街に現れ、吸血鬼の如く獲物を求め徘徊する。
理由はただ一つ。
生きる為だ。
今、この世界で信じられるのは秩序や正義では無い。圧倒的な力、権力、金、そして……他者を引き寄せない程の圧倒的勝利のみ。
少なくとも彼等にとっては、それが全てだった。

それは此処、『ルイス』も例外ではない。
光が差さない路地裏で、今日もそれは行われていた。

「いやっ！　離してっ……！！」
か弱い少女の声は、路地裏の闇に溶け込んで人の耳には届かない。
「大人しくしろ……さもないと、俺のこの銃で、テメェの脳天をぶち抜くぞ」
少女を静かに、されど威圧的に制すは、身長１８０ｃｍを超えるであろう体格の良い男だった。
筋肉隆々の左腕で、今にも折れそうな少女の白い腕を掴み、右手には威嚇のつもりか、鈍く輝く白金の銃を構え、少女の頭に突きつけていた。
「痛い……離して……」
涙にかすれた少女の声にも、男は罪悪感を覚える事は無い。
むしろ、その黒く焼けた顔をニヤリと邪悪に吊り上げた。
「安心しろ……お前もすぐに気持ちよくなるぜ」
男は笑い、少女の衣類に手をかけて行く。胸元のボタンを乱暴に外し、それを脱がしていった。
男の目的など、誰が見てもおおよそ検討が付く事だろう。
欲の解放。
つまり、自分の女への欲求を満たそうと言うのだ。
この男はそうしてずっと、自分の欲求不満を解消して来た。
当然、この時代でもそれは許される事では無い。犯してはならない罪、最低の人間のする事だ。
だがおそらく、誰かがこの状況を見たとしても、誰一人として咎める者はいない。そういう世界に、地球（ここ）はなってしまったのである。
戦争による心身の疲労。未だ癒える事が無い、生々しいキズ跡。
それらが、人間を人間では無くしてしまった。

もしこの行為を見つけたとしても、「自分には関係ない」と、見て見ぬ振りをする。現実(いま)から目を背ける。そうでもしないと生きていけない。

２０年前、第三次世界大戦が遺したキズは、あまりにも深かった。もうこの世界に、人としての心を持った人間など、そうそういないだろう。

男の魔手は、少女の下半身へと移動していく。

少女が目に涙を溜め、絶望に打ちひしがれそうになった時だった。

「おいおい……随分とみっともねぇ事してんじゃねぇか」

暗く淀んだ路地裏に、突如として響く「男」の声。

いや、「少年」と言った方が、この高めの声色には的確だろうか。

男は手を止め、声のした方向へと、その金色の瞳を向けた。そして、その瞳は暗闇に佇む人影を捕らえる。

表通りからの逆光でシルエットのみが浮かび上がり、顔は見えない。だが、背はそれほど高くは無い。その声からして、おそらくはまだ未成年の少年だろう。そしてその背中には、何やら十字型の物を背負っている。

「何だ？　テメェ……」

男は低く、威圧する様に問う。

人影は男の数メートル前で立ち止まり、その血の様に紅い眼(まなこ)で男を突き刺した。

ぞくり、と。男は背筋がなぞられる様な感覚に襲われた。

少女は、絶望に濁った瞳に若干の光を取り戻す。そして、今しがた現れた人影に視線を向ける。

それは、少年だった。それも、こんな月夜に良く映える、儚く美しい少年だった。

年は、やはりまだ２０歳に満たないだろうか。全身は黒いコートで覆われており、白く透き通った肌は首から上のみが露出している。手には、ピエロがする様な白い手袋を身に付けていた。
漆黒の髪から除く二つの紅は、まるで自分の身体を刺し貫かんとしている様な、攻撃的な雰囲気を帯びている。
男はしばし少年を眺めると、やがて上唇を吊り上げた。
「統率機構かと思って構えてみりゃあ、ただのガキか……消えな。正義感が強いのは立派だが、お前が出しゃばる場面じゃねぇんだよ。それとも……お前もこの小娘みたいに犯して欲しいのか？」
「ひっ！」
男は左腕で少女を強引に引っ張る。
少年はその時、少女の両手が何かによって縛られている事に気がついた。
それは、白く発光するロープの様なものだった。だがそれは、ただのロープでは無い。
今この世界で絶対的存在であるもの、《魔術》によって作られたものだ。
つまり男は、魔術を行使する者『魔術師』の一人なのだ。
それもただの魔術師では無い。
魔術によって罪を犯す者、違法魔術師。
この男はおそらく、少年を殺す事にも何の躊躇も起こさないだろう。
だが、目の前の少年は臆する所か、思い切り嘲り笑って見せた。
そして自分より遥かにデカイ男に向かって、こう言ったのだ。
「あぁ、怖い怖い……こんな『クズ』が俺の未来の姿なのかと思うと、吐き気がするな」

少女は思わず、目を見開いた。そして、視線を自分を掴む男へと向ける。
案の定、男はその顔を怒りに歪ませていた。
「何だと餓鬼が……粋がってんじゃねぇぞ！」
男の激昂にも、少年は余裕の態度を崩さない。
「何だ？　『クズ』より『ゴミ』の方が良かったのか？」
「テ……メェ！」
男は少女を左手から放り投げ、少年に向かって突進する。
少女は壁に叩きつけられ、空気が体内から押し出される。そして、今正に男が殴りかからんとしている少年の方へと視線を向けた。
大柄で筋肉質な男と、小柄で華奢な少年。
傍から見れば、百人が百人、男の勝利を確信するだろう。
男の拳には、熱気を帯びた『何か』が纏わりついている。
それは、無数に存在する魔術の一つ『炎術』だ。
纏うと言っても、本当に皮膚にくっついている訳ではない。
もしマトモに喰らえば、火傷では済まないだろう。
だが、少年は笑みを絶やさない。
彼等は認識しているのだ。この時代『単純な力だけが全てでは無い』という事を。
それが、ただ怒りに身を任せ、猪突猛進に少年に向かっている男との、小さな、されど勝敗を分かつ決定的な違いだった。
少年は眼前に迫った男の拳を、ひょい、と意図も簡単に交わして見せる。
もし受け止めてしまえば、単純な力の差で少年は吹き飛ばされてしまうことだろう。それを見越しての、受け流しであった。
刹那――――男の身体が宙に浮く。
彼の周りにだけ重力が働かなくなったのではと錯覚するほど、意図も簡単に。
少年によって吹き飛ばされた。
少年の手に握られているのは、十字架。先ほどまで彼の背中に担

がれていたものだ。全体が暗い灰色に染め上げられた十字架の中心部には、紅い宝石の様なものが埋め込まれている。
地面に強く叩きつけられた男は、すぐさま立ち上がろうと身体を起こす。
だが――――少年は、それを許さない。
男の眼前に、十字架の先を突きつけた。
「動くな」
男の額に、恐怖によって汗が滲む。
男を此処まで恐怖させるのは、目の前に突きつけられた十字架の剣先だけでは無い。
殺気に満ちた、彼の瞳だ。
「――――おい」
「ひぃっ！？」
先ほどまでが嘘の様な、少年の地を這う様な低い声に、男は小さく悲鳴を上げた。
その巨体と態度からは想像出来ない様なその声は、少し滑稽だった。
「これに懲りたら、もう女に手を出さない事だ。もし次また女に手ぇ出してみろ」
刹那、少年は右手の十字架を勢いよく振り下ろした。

少女の眼前に向かって。

少女の髪が揺れる。
しばしの静寂。
直後、彼女を縛っていた光のロープは、ガラスが割れる様な音を立て、少女の手から崩れ落ちた。
少年は再び十字架を男に突きつけ、眼を鋭く細める。
「次は躊躇無く、十字架（コイツ）が貴様の喉を掻っ切るぜ」
「わ、分かった！　もうしない！　もうしないから！　だから許し

てくれ！」
男は懇願する。
少年はしばし、軽蔑を宿した瞳で男を見下すと、十字架を背中へと担ぎなおした。
「それで良い」
少年は吐き捨て、くるりと男に背を向けた。
直後。
男は勢いよく立ち上がり、少年へと殴りかかった。
この男は、何も反省などしていなかったのだ。ただ、少年の隙を狙っていただけだったのだ。
まさに外道。人間の底辺。
だが、そんな事は男には関係なかった。目の前の少年を倒すためなら、手段など選ばない。どんな手を使ってでも殺す。
しかし――――男の拳が、少年に届く事は無かった。
少年に拳が届く寸前。ピタリ。拳が止まったのだ。
そして、ゆっくりと。男は湿った地面へと倒れ伏していく。
「――――遅かったじゃねぇか、お嬢ちゃん」
少年は再び身体を反転させ、呟く。
先ほどまで男が立っていたそこには今、一人の少女が立っていた。
黒いワンピースとニーソックス、その上から漆黒のコートを羽織っている。その黒ずくめの衣装のとは裏腹に、隙間からは純白の肌が光っている。
ゆるいカールがかかった銀の髪を横に分け、瞳には灰色の瞳が無感情に浮かんでいた。
「遅いも何も……虚が勝手に一人で突っ走っただけ」
耳を澄まさなければ聞こえない様な小さな声で、少女は言う。
虚、と呼ばれた少年は面倒くさそうにため息を吐き、右手で黒髪をぐしゃぐしゃとかき回した。
「緊急事態だったんだよ。しゃあねぇだろ」
「まぁ良いけど……それより、その女の人は？」

「ん？　あぁ、そうだ。おいアンタ。大丈夫か？」
虚は少女の前にしゃがみ込み、優しく問う。
もう一人の銀髪の少女は、羽織っていたコートを少女へとかけた。
「あ、はい。その……ありがとうございました」
「良いよ、礼なんて。俺が勝手に首突っ込んだだけだし」
「でも……嬉しかったです。私、怖くて……」
少女の身体は、未だに小刻みに震えている。
虚はうっすらと悲しみを帯びた瞳で少女を見つめると、やがて微笑んだ。
「まぁ、無事だったなら何よりだ。この辺はあまり治安が良くないから近付かない方が良い。
こう言う連中が後を絶たないからな。ったく……機構の連中は何をしてるんだか」
最後の方は誰かに文句を言う様な口調で虚は吐き捨て、やがて立ち上がる。
「さぁて、と。放っといてもこの男は、朝になりゃあ機構の連中に見つかって牢獄行きだろうし、俺ぁ行くとするかな。アンタも十分に気をつけてな。行くぞ、お嬢ちゃん」
「お嬢ちゃんじゃない……私は『ルイ』。いい加減覚えて」
「いや覚えてないわけじゃねぇよ、ただ『お嬢ちゃん』に慣れちまったから。そっちのが楽なんだ」
「じゃあ変えて」
「そんなに嫌なのか？」
「子供みたいで……嫌」
「十分子供だろうが」
「もう子供じゃない……12歳」
「それを子供って言うんだよ」
「虚に子供って言われてたく無い」
「俺ぁこう見えて成人してるっての」
「精神年齢の話」

「なるほど。喧嘩売ってんのか」
「そういう所が子供だって言ってるの」
他愛も無い（？）会話を交わし、虚と少女、ルイは表通りへと戻っていく。
少女はしばしボーっと二人の背中を見つめたが、やがて我に返った様に慌てだした。
「ま、待って！」
少女の呼び止めに、二人は足を止め振り返る。
「何で私を助けてくれたの！？　こんな赤の他人……助ける必要なんて無いじゃない！」
少女の声に、虚は一瞬目を見開き、やがて微笑んだ。
それはとても儚げで、悲しげで――――少女を哀れむ様な眼だった。
そして、食い入る様にこちらを見つめる少女に向け、告げる。
「俺は、人として当然の事をしただけだ」

ただ一言、抑揚なくそう呟き、二人は表通りの光の中へと消えていく。
彼の言った通り、それは人間ならば当然の行動だ。
困っている人がいる。だったら助ける。手を貸す。たった、それだけの事だ。
そう――――それは、人として当然の行動だった筈だ。
彼はその当然だった筈の行動をしたまでなのだ。
少女はそれ以上、虚とルイを呼び止めようとはしなかった。

機関や組織に捉われる事無く、ただ自由に、気ままに、自分の中の正義を貫き通す。
人は、彼をこう呼ぶ。

世の混沌を支配する者『道化師（ジョーカー）』と――――――。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１－２　＝ごく有り触れた日常（しあわせ）＝

国際魔術師統率機構。通称『ＩＭＣＳ』。
全ての魔術師を束ね、管理する総本山的存在。そして、実質的に世界の頂点に立つとされる、巨大魔術組織だ。
統率機構は四つの部隊、「スペード」「ハート」「クラブ」「ダイヤ」に分かれている。そしてそれぞれの隊長を『統率者（コマンダー）』、そして彼等四人の長、実質的な世界の頂点に君臨する者を『支配者（アリス）』と呼ぶ。
だが、一般国民が知っているのは、その程度の漠然とした知識でしか無い。
何を行動原理とする組織なのか。目的は何なのか。誰が何のために創設したのか。詳細は何一つ分かっていない。
誰か、何処にあるのか、何をしているのかも分からず、その存在自体認識出来ない。
そんな曖昧極まりないモノに、人は今、支配されている。
不安もある。何故自分達に姿を現さないのか、と言う怒りも当然ある。だが、今この世の中では、彼等に支配される以外、生きる手段はない。
彼等と敵対する、という事は、それすなわち『死』を意味するのだから。
国民は今日も、見えざる支配者に恐怖や不安を抱きつつ、この腐りきった世界を生きて行くのだ――――。

■　□　■　□

「今朝、ルイスの表通り（メイン・ストリート）の路地裏で、違法魔術師が倒れているのが発見された様ですね」

「……はい」
四方が黒によって埋め尽くされた密室に、二人の女声が響き渡った。
一人は、少女の様な高い声を持ちつつも、何処か妖艶さを纏った声質をしている。
もう一人は、お淑やかで落ち着いた声質を持ち、たった一言呟いただけで、確かな存在感を醸し出していた。
「聞く所によれば、彼は昔からあの辺り一体で処女を攫っては喰らう下衆……もとい、違法魔術師だったそうじゃないですか。確かルイスの管轄は、アナタですよね？」
「はい。間違いありません」
「何故、今の今まで放置されていたのですか？」
「彼は己の姿を晦ませる魔術の扱いに長けており、発見にかなりの困難が生じておりました」
「なるほど……いるんですよね、そういう輩が。夜は大きく尊大に振る舞いながら、日が昇るとただ己の保身に走る卑怯者が」
溜息交じりに、少女は吐き捨てる。
「それで……発見時の状況を聴きたいのですが……」
少女が問う。その声は、何処か楽しそうな雰囲気を帯びていた。
女性は問われるや否や、溜息を吐いて目を伏せる。
「男は表通りの方へ頭を向け、うつ伏せに倒れていました……。首裏に青い痣が出来ており、おそらく鈍器の様なもので強打されたと見て間違いないかと」
「そうですか……」
それだけじゃないでしょう？　とでも言いだげに、少女はニヤニヤと唇を吊り上げている。
女性は目を開き、しばし少女の顔をじっと見つめると、やがてゆっくりと口を開いた。
「それだけですよ。他には何の痕跡も残っていませんでした。ただ……」

「ただ？」
答えを急かす様に、少女は言う。
その声から、興味津々なのが見え見えだ。どうやら彼女は、感情が言葉に乗って出てくるタイプの人間らしい。
「通報して来た少女の話では……『十字架を背負った青年と小柄な少女が現れ、一瞬にして男を倒した』との事らしいです」
答えを聞くと、少女は満足そうに笑みを浮かべ、椅子に深く腰掛ける。
「そうですか……やはり、彼等が動いたのですか」
「『動いた』と言うより、『偶然事件を目撃し、首を突っ込んだ』らしいですよ」
「同じ事ですよ」
女性の返答を、少女は遮る。
「どちらにせよ、彼は現れた……それだけの情報が聞けただけで、私は満足です」
女性は、目を細める。
「そう怪訝そうな顔をしないでください。別に彼の行動を賛美している訳ではないのですから」
「当然です。彼の行動は、統率機構（われわれ）への反逆とすら取れる物です。何故、ブラックリストに載っていないのかが不思議なほどです」
「良いではないですか。別に一般市民に手を出しているわけではないのですよ？
むしろ違法魔術師のみを狙っている、義賊の様なものです。今、世界政府に害を与える様な存在ではない以上、私達が狙う相手ではないでしょう？」
「今は、の話ですけどね」
「もう、アナタは相変わらず超が付くほど真面目ですね」
つまらない、と言った風に少女は言い、わざとらしく頬を膨らます。
だが、すぐにそれは真剣な眼差しへと変わった。

「それより……あの件はどうなっているのですか？」
あの件。その一言で通じたらしく、女性は目を細める。
「変わりありません。しかし……道化師が動いたのだとしたら、そろそろ動く時かもしれません」
「では、引き続き監視を続けてください」
「はい」
「分かっているとは思いますが、今回は完全なる傍観者に回る事です。
しかし、もし『アレ』が世界政府にとって邪魔となりえる存在であるのならば……」
「……分かっていますよ」
その声は、心なしか少し曇っていた様に聞こえた。
少女は女性の心を知ってか知らずか、微笑みを浮かべてみせる。
「では、行ってください。健闘を祈っていますよ、ハート部隊統率者・シャーリー＝ローレライ」
少女の優しくも威圧的な言葉の前にシャーリーは方膝を付き、頭（こうべ）を下げた。
「はい――――支配者（アリス）様」

■□■□

翌日。
悪い意味で大きな変貌を遂げてしまったこの世界にも、朝は平等に訪れる。
ルイス郊外にひっそりと構える喫茶店『Ｐａｒａｄｏｘ（パラドックス）』も、当然例外ではない。
この喫茶店の二階を間借りしている身である曽根崎虚（そねざき・うつろ）は、朝が大の苦手だった。
元々夜行性型人間だという事もあるが、あの気だるい感覚や燦々と輝く太陽の光が、どうも苦手だった。

故に彼は、朝滅多に外に出る事がないのである。
今日も、このままベッドの中にカタツムリ状態で朝を過ごし――
――
「虚、起きて」
――――と言うわけにもいかない様だった。
ベッドの優しい温もりに身体を預けていた虚を、突如として妙な重力が襲う。
加えて蚊の泣く様な小さな声を聞き、虚はため息を吐き、布団から顔を出した。
見るとそこには、チェック柄のミニスカートとカッターシャツ、触れるだけで折れそうな細く白い両脚には、昨日と同じく黒のニーソックスを身に付けたルイが、その無感情な二つの灰色を虚に向けていた。
虚は目の下にうっすらと隈を作りながら、ルイを見つめる。
今の彼女は、馬乗り状態で虚の身体に乗っかっている。
そして下半身にはミニスカート。当然、そんな格好でそんな態勢をしていれば、見なくて良いものまで見えてしまう。
「……お前、無防備すぎるぞ。男はどいつもコイツも野獣みてぇなもんなんだから、気をつけろ」
「変態」
虚のちょっとした心遣いを無視する様なルイの一言が、虚の心を突き刺した。
思わず目を細め、虚はルイを少し睨む。
「……何でそうなる？」
「虚が私みたいな美少女の下着を見て興奮する様な変態ロリコン野郎だったなんて……残念」
「俺がいつ興奮したってんだよ。つーか自分で美少女とか言うな」
「困った……これから虚とどう付き合っていけば良いんだろ」
「人の話聞けよ」
ため息交じりにはき捨て、虚はゆっくりと起き上がる。両手を布

団の温もりから名残惜しそうに解放し、おおよそ無いに等しいルイの身体を抱きあげ、とりあえず床に下ろした。
「とにかく、俺ぁ朝はゆっくり寝たいんだよ。悪いが遊び相手なら、下の連中に頼んでくれ」
「そうじゃない」
ルイは再びカタツムリになる虚から、布団を引っぺがす。
虚は眠そうに目を細めたまま、ルイを見つめる。
「今ね、マナからお使い頼まれたの……虚も付いて来て」
「お嬢ちゃん一人で行きゃ良いだろ。頼まれたのはお嬢ちゃんなんだから」
「虚も一緒じゃないと、嫌」
「何でだ？」
「荷物持ちがいないから」
「さっさと行け性悪娘」
虚の反応に、ルイはしゅん、という効果音が付きそうな表情を浮かべる。
「……冷たい」
「悪かったな」
「昨日は一緒に服買いに行ってくれたのに」
あの夜の出来事の後だろう。どうやら二人は、ルイの服を買う為に外出いていたらしい。
「アレは夜だからだろう？　お前も知ってると思うが、俺ぁ朝が苦手なんだよ」
「虚はもう、私なんてどうでもいいんだね」
「だから人の話を———」
「『こんな性悪毒舌少女を拾わなきゃ良かった』って……本当は思ってるんだね」
「……もしもし？」
「もう捨てられちゃうんだね私……」
「……」

「それか、これから一生、変態ロリコンの虚の肉奴隷として生きいかなきゃならないんだね……」
「だぁぁぁもう！　うるせぇな！！」
ガバッ！　と音を立てて、虚は布団から上半身を起こした。
こちらをじっと見つめるルイを見てため息を漏らし、頭を抱える。
「分かった……一緒に行ってやるから、下で待ってろ」
「……うん、分かった」
ルイは感謝の言葉を述べる事もなく、至極当然と言った様に言うと、そそくさと虚の部屋から出て行った。
タンタンタン……と階段を駆け下りていく音を遠くに聞きながら、虚はベッドから這い出す。
「友達いないだろうなぁ……アイツ」
ルイの将来を心配しながら、虚は壁に掛けられた漆黒のコートに手を掛けた。

■□■□

『喫茶店Ｐａｒａｄｏｘ』。
虚とルイが現在間借りしている店の名だ。意味は『逆説』だが、店主が言うには、特に意識して付けた名では無いらしい。
元々その店主は虚と旧知の仲であり、当時虚は特定の住居を持っていなかった。
だが、虚がルイと行動を共にする様になると、さすがにそれでは申し訳ない。そこで、以前から入り浸っていた喫茶店の店主に頼み込んで（と言うより半ば脅して）、喫茶店の二階の部屋を、二つ間借りしたのである。
その店主はと言うと、現在営業時間へ向け、コーヒーカップや皿などを丁寧に磨いている。年は、およそ２０代前半だろうか。茶色を基調とした妙にロックな服が良く似合っている。そして、何を思ったか頭には猫耳が二つくっついている。

その隣には、桃色の髪をさらさらと流す、１６ばかりの少女がいた。おそらく、この店の店員の一人だろう。
学生服の様な格好の上からエプロンをつけている姿は、何となく様になっている。
少女は手に持った大皿を凝視すると、やがて微笑んだ。
「マスター！　これどうですか？」
「ん～？」
マスターと呼ばれた男は、己の手を一旦止め、少女から大皿を受け取った。
注意深く隅々まで見渡した後、男は優しく微笑みかけた。
「うん、文句なし。完璧だよ」
「本当ですか？　よかったぁ……」
ほっと胸をなでおろす動作をする少女。
その時、ギィ……ギィ……と階段が軋む。下りてきたのは、いつもの黒いコート姿の虚だった。まだ眠いのだろう。大きな欠伸を右手で押さえ込もうとしている。
「お早うございます、虚さん」
「あぁ、お早うマナ」
名を呼ばれた少女、マナ＝クラウベルは、太陽の様な輝かしい笑顔を虚にぶつけた。
虚はマナに微笑みを返すと、やがてしんと静まり返った店内を見回した。
「相変わらず客いねぇな、チェシャ」
「客も何も、まだ開店前だよ」
「変わらないだろ。二、三人ばかり増えるだけで」
吐き捨て、虚はカウンター席に座った。
何やらぶつぶつ愚痴っている本名不詳の店主、通称『チェシャ猫（頭の猫耳が由来）』を尻目に、新聞を広げた。
今、ルイスを騒がせる『通り魔事件』の犯人が捕まったとか、怪しげな魔法薬の宣伝とか、有り触れた記事を軽く流し読みしながら、

パラパラと新聞をめくっていく。
「朝御飯、何か用意しましょうか？」
「いや、良いよ。新聞読んだらすぐに出るから。そういや……」
虚はしばし新聞から目を離し、再び辺りを見渡す。
「お嬢ちゃんは？　アイツに叩き起こされたんだけど」
「外で待ってるってさ。何か落ち着いていられないみたいだったぞ？　相当楽しみなんだな」
「そっか」
ため息交じりに吐き捨てる虚に、マナは微笑んで見せた。
「ふふ、ルイちゃんはよっぽど虚さんが大好きなんですね」
「うーん……そうなのか？」
何かおもちゃにされている感がすごいんだが……、と虚は内心首をかしげた。
「でもまぁ、お嬢ちゃんはずっと一人で生きてきたからな……こうやって人と一緒に買い物に出かけるってのが、幸せなんだろうな」
感慨深げに、虚は呟いた。
虚と出会うまで、ルイはたった一人でこの世界を生き抜いてきた。親の顔など、もう覚えてもいない。気付いたとき、彼女はルイスの裏道で一人、置き去りにされていた。所謂捨て子だ。
この腐敗した世界で、１２にも満たない少女が、たった一人で生きる。
それは、とてつもなく苦しく、悲しく、絶望的な事だ。
生きる為、彼女は窃盗を始めとするありとあらゆる犯罪に手を染めた。一時、統率機構の者に追われた事もある。
その時に救ってくれたのが、虚だったのだ。
そんなルイにとって、こうやって人と……曽根崎虚という初めての『家族』と買い物をするという、一般市民にとっては至極当たり前の行為が、かけがえのない幸福として映るのである。
そんな彼女の苦しみを知る虚は、ふと微笑む。
（もし、お嬢ちゃんの中の何かが変わったのだとしたら……俺も嬉

しいんだけどな）
　静かに音を立て、立ち上がる虚。新聞をカウンターの隅に置き、大きく背伸びをした。
「さて、待たせんのも悪いし、行ってくる」
「あぁ」
「お願いしますね、虚さん。本当は私が行ければ良かったんですが……生憎手が放せなくて。買う物はルイちゃんに教えてありますから」
「あぁ、分かった」
　言うが早いか、虚は扉の鈴を鳴らしながら、慣れない日差しの下へと飛び込んでいった。

■□■□

「おう、待たせたなお嬢ちゃん」
　燦々と照りつける太陽の光を全身に浴び、Ｐａｒａｄｏｘの壁に寄りかかるルイに、虚は声をかける。
　虚の姿を確認するやいなや、ルイはゆっくりと壁から身体を離す。その顔は、心なしか少し綻んだ様な気がした。
「大丈夫。ほんの９分３８秒ほどしか待ってないから」
「秒単位で覚えてんのかよ……」
「体内時計には自信がある」
　グイ、と、ルイは虚のコートの袖を、少し強く引っ張った。
「それより、早く行こ……待ちくたびれちゃった」
「お、おいおい引っ張るなよ」
　そんな引っ張らなくても、俺は逃げねぇよ。などといいながらも、ルイは手を放さない。放したくない、とでも言う様に。
　ルイにとって、やっと手にした幸せなのだ。
　絶対に放さない。放すものか。
　ルイの力は、緩む所か増していった。

それでも、虚が全力で振り払ってしまえば、すぐに解けそうな微弱な力だ。
しかし、虚は振り払う事なく、ルイの姿を後ろから眺め、笑った。
（本当に心配性だな……そんな事しなくても、俺はお嬢ちゃんから離れたりしねぇってのによ）
虚もまた、ルイと同じ想いなのだ。
ルイを、家族を、そしてこの有り触れた幸せを手放したくはない。
もしルイに頼まれたとしても、この手を放す事はないだろう。
おそらく今、傍から見ればだらしないとさえ思われる様な笑みを、自分は浮かべているのだろう。
そんな事を思いながら、虚はコートを引っ張る小さな手を見つめていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１－３　＝崩壊の足音＝

西ヨーロッパの北海にひっそりと浮かぶ島『インネオ』。
アメリカやロシアなどの主要国家に代わり、世界の中心となっている国だ。首都『ルイス』を始めとする発展都市も多い。

だが、それはあくまでこの時代にしてはの話だ。

地球にとって発達の全盛期だった西暦２０００年代前半に比べれば、文化レベルはかなり落としている。
原因は一つ。
第三次世界大戦だ。
あの忌まわしき戦いにおいて地球は大打撃を受け、先述したアメリカやロシアなどの世界の中心だった地は特に集中砲火を浴び、現在では貧民の溜まり場となってしまった。
かつての歴史の最前線を走っていた頃の威光ある姿は、微塵も感じられなくなっている。
そして此処、インネオもまた、程度の違いはあれど打撃を受けた。
多くの国より魔術攻撃を受け、人は死に、家は焼かれ、辺り一面が焼け野原と化し、その結果他の国と同じく、名前すらも奪われてしまった。
国際魔術師統率機構が設置され、今や世界の頂点とまで言われるこの島が、かつては『イギリス』と呼ばれていた事を知る者も、もう数えるほどしかいなくなってしまった。
まったく、嘆かわしい事だ……。

■　□　■　□

白昼堂々と市街地を歩くという経験は、虚にはあまり無い体験だ

った。
現在朝の１０時。
いつもなら、まだまだ布団カタツムリ状態となっている時間帯だ。
何度も言っている様に、彼自身が朝に弱い、という事も当然理由の一つだ。
そもそも虚は、。ルイやチェシャ猫、マナなどの親しい者達ならまだしも、他人と関わる事を極力避けている。
違法魔術師とは違い手配書やら何やらが政府から出ている訳では無いが、もし自身を知っているか、恨みを持っている人間などに出会えば、血の気の多い者達がいる今の時代、ほぼ間違いなく交戦になるだろう。
独自に違法魔術師を裁く虚の行動に不快感や嫌悪感を持つ者は、多くは無いが少なくも無いのだ。
人の少ない夜なら、見つかってもまだ良い。万年黒いコートなので、見つかりにくくもあるだろう。
だが昼にそんな輩と出会うと、必然的に周囲にも顔が知られてしまう。
そうなると、街にもいずらくなってしまう。
自分だけならまだしも、今はルイという、家族とも言える存在を、大げさに言えば『養っている』身だ。そんな事になっては、彼女に申し訳ない。
それに、自分達を匿ってくれているチェシャ猫達にも、少なからず被害が及ぶだろう。
無愛想に振る舞いながらも根は情に篤い虚にとって、それは絶えがたい事だった。
（まぁ、俺を狙う理由がある様な奴等も、こんな昼間に市街地には出てこないか）
杞憂だったのかもしれない。
虚は、微笑み交じりのため息を吐いた。
「どうしたの？　虚」

虚の急な行動を不審に思ったのか、ルイが首を傾げる。
「いや、何でもねぇよ」
虚は言い、次にその紅の瞳を市街地へと向けた。
時間が時間なだけに、街は多くの客と店で賑わっている。
店と言っても、四本の木柱に白いテントを張っただけの簡易的なものだ。
大戦で森林が焼かれ、材料が手に入らないのである。
Ｐａｒａｄｏｘの様なちゃんとした建物として存在している店は、この時代では滅多にない。
あの店は場所が中心から離れている事もあり、戦時中の壮絶なる魔術攻撃を、奇跡的に免れたのだ。
それをチェシャ猫が買い取り、現在に至る。
聞いた話ではあるが、２０年ほど前までは、Ｐａｒａｄｏｘの様な店がこの辺りを埋め尽くしていたという。
尤も、虚が生まれる以前の話なので、彼も詳しいことは知らないが。
（想像もつかねぇな……この殺風景（これ）が普通になった今じゃ）
ぼんやりと、そんな事を考える。
昔は良かった、などと言う大人たちは、今でも少なからずいる。
今を見ようとせず、過去の栄光に未だすがり付こうとしている者達だ。
次世代を生きる自分達にとって、それは単なる夢物語でしかない。
縄文を生きた人々に、「２０００年後には車という機械が出来ますよ」などとほざく様なものだ。
（結局、進むしかないよな。俺達は……）
思わず、虚は唇をキュッと結んだ。
その時、
「虚……どうしたの？」
ルイの、小さくも耳によく通る問い掛け。
虚は我に返り、苦笑交じりにルイを見る。

「何でもねぇよ。どうした？」
「うん。何か……」
視線を落とし、ルイは悲しげな表情で虚の腹辺りを見つめた。
「虚……凄く怖い顔をしてたから」
虚は思わず、心の中で舌打ちをする。
何てバカな男なんだ自分は。こんな小さな子にまで、いらぬ心配を掛けるつもりなんか。
自分への嫌悪と不快感が、虚の思考を埋め尽くす。
思わず視線を泳がせ、虚は再び、笑う。苦味を交えつつ。
「――それよりお嬢ちゃん、何を買うんだ？　さっさと済ませて帰ろうぜ」
かなり強引な話題転換だった。動揺しているのが見え見えだ。
だが、ルイはそれ以上問い詰めては来なかった。
「あ、うん。えっと……とりあえず魚介類を適当に二、三匹買って来てって言ってた」
「そりゃまた大雑把だな……。
しかし魚介類かぁ……金は足りんのか？」
大戦による海水汚染が原因で、人間が食べられる様な魚介類の水揚げ率は、恐ろしく低下している。
揚がったとしても、かなり高値で売買されており、一般人にはおよそ手が出ない代物だ。
「大丈夫……だと思う」
ルイの返事はかなり心配なものだったが、考えた所で値引きされるわけでもない。
ましてや、こちらの軍資金が増えるわけでもない。
「とりあえず、その辺りの店を周って見るか？」
「うん……」
二人は頷き合い、賑わう市街地の人ごみへと姿を消した。

■□■□

突如、青を基調とした統率機構の軍服の右ポケットが振動を始めた。
統率機構所属魔術師シャーリー＝ローレライは、その源となっている小さな箱を取り出す。
箱の名は、携帯電話。何十年も前に世界を支配した『科学』の、ほぼ唯一の生き残りだ。
魔術が主体となった今、電波塔などがある筈も無い。
使用には電撃魔術を応用し自ら電波を放ち、同時に相手の所在地を正確な座標計算で導き出さねばならず、今や高等魔術師でしか扱えなくなってしまっている。
お世辞にも、便利な代物であるとは言えない。
だがそれは、逆に言えば高等魔術師が扱えば、伝達魔術を使用する事に比べれば格段に早く、かつ簡易的に会話を行う事が出来るのだ。
シャーリーは携帯を取り出し、ディスプレイを確認する。
そこには、デジタル文字で素っ気無く『支配者様』と表示されていた。
一瞬眉を顰めつつも、シャーリーは右手の親指で通話ボタンをぎこちなく押す。
そのまま、耳にスピーカーを近づけて行く。
機械のヒンヤリとした感触が、何となく心地よかった。
「シャーリーですか？　私です」
機械越しに聞こえるのは、聞きなれた少女の声。
統率機構の頂点に立つ支配者の声に間違いなかった。
「私の携帯なのですから、私以外の誰が出るというのですか？」
淡々と言ってのける。
「相変わらず詰まらない人ですね」
ため息交じりに呆れられた。いつもの事だが。
「それで、そちらの状況は？」

ほんのりと好奇心の風味が混じった問い掛け。
まるで、何かが起こって欲しいと思っている様だ。
「……今のところは、まだ」
「そうですか」
途端に、支配者の声は落胆の色に染まった。
これもまた、いつもの事だ。自分の思った通りの展開が起こらなければ、あからさまに気分を害する。
シャーリーは、時々そんな彼女が分からなくなる。
「では、失礼致します。変化が生じ次第、こちらより連絡致しますので」
「えぇ、お願いしますね」
プツン、と音がした気がした。
それきり、支配者の声は聞こえない。
代わりに聞こえるのは、通信が切れた事を示す、空しい機械音だけだった。

■□■□

「やっぱり何処も高いな、魚介は」
途方に暮れた様子で、虚は呟いた。
あれから３０分ほど市場を周ったが、どこもかしこも高額なものばかりで、現在の所持金では一匹買うので精一杯だ。
ルイもまた、表情に影を落としている。
「この御時世じゃ仕方なし、なぁんて言っちまえばそれまでだけど。そろそろ疲れて来たな」
「……コート脱げば？」
「いや、暑いってわけじゃない」
「そう」
本音を言えば、彼のコートの下を見てみたい、という思いも少なからずあるのだが。

「残念」
「は？」
「……何でもない」
ルイは目を逸らす。
虚が不思議そうに首を傾げると、
「おーい！　お二人さん！」
男性の声が、人の賑わう街で驚くほどよく通った。虚のものではない。
だが、二人はその声に聞き覚えがあった。
声のした方向に向けられた二人の視線の先に同時に映るのは、こちらに向けて元気に手を振る一人の男。
年は３０に届くか届かないか位だろうか。
程よく日に焼けた筋肉質なその男を見るなり、虚はやんわりと微笑んだ。
「よぅ、久しぶりだな。レイン」
「こんにちわ、レインさん」
男の名は、レインナード＝パスラル。通称レイン。
その健康的な日焼け肌には、おおよそ似つかわしくない名前だ。
「最近顔見てねぇから、死んじまったかと思ったぜ虚」
「お前の雑貨屋は日が暮れたらしめちまうからな。
それに、俺がそう簡単にくたばる男に見えるか？」
「はは、違いねぇ」
豪快に笑うレイン。
大雑把で無遠慮な彼の性格が、虚は嫌いでは無かった。
むしろ、妙な距離を取られるよりよっぽど心地いい。
「ルイも久しいな！　元気だったか？」
「問題ない……レインさんも元気そうで何より」
「おうよ！　それだけが取り柄だかんな！」
レインは再び笑う。朝から元気な男だ。
尤もこの男の場合、年中こんな感じだが。何でも風邪すら引いた

ことが無いとか。
（何とかは風邪引かないって言うが……ありゃ本当だな）
心の中で苦笑する虚。
そんな彼を、レインは見つめる。
「それより、お前等こんな所で何やってんだ？」
「あぁ、ちょっと買い物を頼まれてな」
「へぇ。チェシャ猫かい？」
「いや、マナだよ。ほら、二週間前に入った」
「ああ！　あの可愛らしい子か！」
右手でポン、と左掌を叩くレイン。
「それで、何を買いにきたんだ？」
「魚介類を適当に二匹三匹買ってくれってさ」
「魚介！？　そりゃまた……大変だろう」
「まぁ、な。さっきから店周ってんだけど、やっぱ高くてさ」
「そうだろうなぁ……そんなお前等に、いいものをやろう」
言うが早いか、レインは何やら後ろの籠をごそごそとかき回し始めた。
虚とルイが顔を見合わせていると、途端にドン！　と大きな音がした。
二人がぎょっとした様子でそちらを見ると――――
「わぁ」
「マジかよ……」
反応は違えど、二人の感情には少しの誤差もない。
当然だろう。いきなり目の前に、艶のある身体を太陽に照らつかせた魚が三匹も放り出されたのだから。
驚く二人に、レインは得意げに鼻を鳴らす。
「どうだ。今日の朝入ったから、鮮度は保障するぜ？　何、俺とお前等の仲だ。格安で売ってやるよ」
「いいの？」
「おう！　男に二言はねぇよ！」

「……ありがとう」
ルイはかすかに微笑みを浮かべ、告げる。
感情に乏しい彼女にとって、最大限ともいえる感謝の言葉だ。
レインもそれをよく分かっているのか、ニッと笑ってみせる。
「おうよ！」
そんな二人を、虚は遠巻きに眺めていた。
彼の頭に浮かぶのは、ある一つの疑問。
（ここ、雑貨屋だよな？）
雑貨屋とは、簡単に言えば日常生活に必要な物（文房具など）を売る店だ。まかり間違っても、スーパーや魚屋では無い。
一体どんなルートでこんなものを手に入れたのかは疑問だが……。
（まぁ、お嬢ちゃんが愉しそうで何よりだ）
やはり、虚との出会いは彼女の中で大きなものだったらしい。
多少くすぐったいが、同時にそれはとても嬉しい事実だ。
微笑を顔に張り付かせて二人を見つめる虚。
だが、不意に――――その笑みをかき消す「何か」が虚の背筋を凍らせた。
とても微弱だが、それでいて確かな違和感。
そこから伝わる――――抑えきれないと言わんばかりの、感情。
（どうも、穏やかじゃねぇな）
目を細める虚。
そこへ、買い物を終え、右腕に魚が三匹入った買い物籠を持ったルイが戻ってきた。
「虚」
「え？」
そこで我に返り、虚はルイを見つめる。
なんとなくデジャヴを感じた虚だったが、触れない事とした。
「いや、何でも……」
ない。
そう続けようとして、虚は言葉を止めた。

しばしの沈黙。
その後、虚はゆっくりとルイの顔を見つめる。
「悪いお嬢ちゃん。俺ぁもうちょっと市場を見て周りたいから、先にＰａｒａｄｏｘに戻っててくれねぇか？」
「いいけど……どうしたの？」
純粋無垢な問い掛けに虚は一瞬言い淀み、やがて苦い笑みを浮かべる。
「別に何でもねぇよ。ただ、久々にお天道さんの下に出たんだし、もうちょいいても良いかと思ってな」
「そう……なら私も一緒に」
「良いよ。せっかく新鮮な魚をレインが提供してくれたんだ。俺に付き合わせて腐っちまったらもったいないだろ？」
「でも……」
ルイは視線を地面へと落とす。
虚は若干良心が痛んだが、やがて微笑みを浮かべ、ルイの頭を撫でた。
「ゴメンな。でも、すぐ帰るから安心しな」
「……うん」
コクリ。ルイは首を縦に振る。
良い子だ、と優しく微笑み、虚は立ち上がった。
「じゃあ、また後でな。お嬢ちゃん」
「うん。気をつけてね」
そう言って、ルイはパタパタと小走りで、人ごみへと消えていった。
虚はそれを、見えなくなるまでずっと見つめていた。
優しく、愛おしそうに、そして何処か悲しげに。
だが、すぐにそれは険しい無表情を浮かべ、己の目的地へと歩を進めた。

■□■□

市街地から少し離れた、崩壊寸前の廃ビル。
これもまた、Ｐａｒａｄｏｘと同じ。第三次世界大戦の傷跡の一つだ。
安全上などの門題から一時期取り壊しの話も出ていたが、「あの惨劇を二度と繰り返さないため」という戒めの為に、残る事になったのか。
当然、今は立ち入り禁止となっている――――筈だ。
その廃ビルに今、一つ人影が見えていた。
女性だ。年は若い。寝癖だった茶髪が印象的である。
視線の先には、賑わう人ごみ。
だが、彼女の漆黒の瞳には、たった一人しか映ってはいなかった。
年不相応の白い髪と、無感情な印象を受ける灰色の瞳を持つ少女。
右腕には、魚が三匹そのまま入った買い物籠をぶら下げている。
黙って少女を見つめるその瞳は、その少女に負けず劣らず無感情なものだ。
だが、身体から放たれる「殺意」は、隠し通せてはいなかった。
「――――くだらない」
その声は、聞く者を凍てつかせてしまいそうな、そんな雰囲気を纏っていた。
女はそのままゆっくりと右手を挙げ、その照準を少女へと向ける。
その時だった。
「おい」
たった一言。だが、それは重く女にのしかかった。
思わず、女は目を見開き、少女に向けていた右手を声に向ける。
そこに立っていたのは、漆黒のコートと髪を持つ紅眼の少年。
面識こそ無かったが、女の方は、その姿をした者を聞いたことがあった。
「道化師……」
「おっ、俺を知ってんのか？　嬉しいな」

一瞬、虚は笑う。
だが、すぐにそれはかき消されてしまった。
見る者全てに恐怖を抱かせる様な表情に。
「悪いが、その女の子は俺の家族みたいな子(もん)でね……手ぇ出さねぇでくれないか？」
「……いつから気付いていた？」
「バレバレだっての。迷彩魔術で必死に気配消してたみてぇだけど、身体中から殺気が滲み出てんだよな、アンタ……おそらくは、殺魔(キラ)師か？」
殺魔師。呼んで字の如く殺しを性分とする魔術師である「殺し屋」だ。当然、違法魔術師の一種である。
虚の話を聞いてか聞かずか、女は目を細めた。
それは正に、「殺意」と名付けるに相応しいものだ。
「聞く耳持たず、か。しゃあねぇ……」
一旦眼を伏せ、しばし瞑想に入る。
だがすぐに、その瞳は開かれた。
先ほどとは違う、明確な「殺意」が篭っ鋭利な瞳が。
「実力行使しかねぇ見たいだな……」
「最初から、私はそのつもりだ」
二つの殺意が火花を散らしたその瞬間――――
「行くぞ……道化師」
「良いぜ……来いよ、殺魔師」
幕は、開かれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5160z/

JOKER

2011年12月21日00時56分発行